道乃幸　中

内閣文庫
和書
類
三五九九五
號
三
冊
一七七
函
一五
架

史
三八

内閣文庫
番號	和	35995
冊數	3	(2)
函號	177	939

国立公文書館
National Archives of Japan

道化章

閣62

山に笠山の外山より外山を見るハいとふかく
そのふもとの山ハ村消しはなし恵みまさりけれ
えもいはれずまさりかくてぞめつる之れハ名字
しるしなき西南にむかへハ右に招提寺ある境にて
大安寺ハ廃址残りて行ハ右に興福寺の旧
跡に見えつるハ其外ハ皆覚への内に誠讃門といふは
新楊寺の那山とよぶ年暁ものほり清坊ある
林の若草の奈良の添上こほり平群郡の何れも
あらはしして清俊寺の行普の院西南院蔵光
院西園院などと出して此の時ハおのつからもいつれも

よりて諸葉は多く草剣のまへなりといふ
佛像をさへめつらかなるものとハいへと此外にも
ここに三條院といへる所にて宝物をも拝見し先
七種の宝物とて尤も尊重せらるゝハ先ゆる
其種ハ雑具物具の書幅聖徳太子真筆
紺紙金泥の梵網経并代神鈴賢聖瓶大子御
足印佛齒佛舍利なり梵網經ハ真ハ字なり
神代鈴ハ五大力明王の像ありて天竺國の物なり
賢聖瓶ハ文殊菩薩の元をたとへハ孔夫子榮啓期
四皓鬼谷子蘇秦張儀の像なとありて人の銘ありとなり

筆跡ともに至宝なるよし見えしめてなる此外唐代舞
甲のうしろに開元十三年歲在甲子五月五日於九龍
縣造と二行にかきたる所あり金山寺香爐ハ
金の大定十八年の記ありとなり何ハ此文字ハ
方よりあるひしもなく何ハものこしく人の目にてまし
さらにそとりても行しハ此額の金山寺大般
涅槃經ともあり此の字方に似たくあり天平勝寶
八歲聖武天皇御寄附牒小階見えすなかなか讀ふ
て法隆寺古印二ツ一ツハ法隆寺印一ツハ鶴寺倉印
いつれも朱文なり石筒鞨鼓并小床還城樂面等

らに源信氏永仁四年七月七日と彫てありて又妹子
請来の漆革箱蓮葉の中に經あり いはゆる隋代の
物とこそ見ゆ
廿一日宛ある所には綱封藏といふ文庫より
寶物拝見善光寺如来の御書とて数通寶蔵出せし
物何も勅封にて拝しく綴しやうに見えし壒囊抄
によれば太子と法華の義疏あるべし百濟の阿佐
太子筆上宮太子の肖像なり是を第一の
物とこそ傳ふ阿佐は百濟氏の太子傳にもありし人なり
銘箱と云ふ何かの是は風情なりしとぞ物云ふ人は

又ある繪殿の經并と云は古き代々の消息也
この代々元とし屏風に書しを比べ經也
素絹真書は世尊寺經朝臣と云し人の筆なりと
此代の遺跡は伊房卿なりしといふ 柳紙
經は後三條院の延久元年よりの比々是明院の
建武五年繪所法橋寂圓所持し又後圓融院此
康暦元年中覚坊僧正覺なる後光厳院の延寶
年経師七郎兵衛門市郎兵衛第二殿の修覆をなし
かく天明元年に見えて是殿よりは新圖をまうけて
是とは屏風よとし紙本二枚わ板おがて

一石四升巻尾古量考ノ條ニ二石四斗ニ作ル

諸々の假借とへるものは書画ともにありとおもふ事などは宗
たりしものなるべし。なほとにかくさまざまなる新図には大
坂なる御法服用圭文字は今も北柳原殿にて太子
黄丹御衣膳妃御下帯同御鏡二面古硯味摩に詳具
伎楽面数多おなじ御前に伝へたまへり 古鏡二面ノ内一面ハ背ニ龍
と塗身一面ハ縁ニ五言の詩一首かゝりそれ心得がたき儀なれど其詩
ハ独有離楼地山亭臨女蘿澗清長低篠池開半巻荷野花朝暝落盤根
歳月多傳杯無賞慰峡鳥自往過 又銅升とて調とりて造りたる御升の形した
るあり 重廿六斤受一石四升と彫てあり 今の升
にて六斗四升入れ升なり 今のとりはかりてみて三貫三百五十
あり 又方九寸七分深三寸四分の木升もあり 太子

御菌とて有るものあり 絁の類なれども中信の細纖
延出せるもの裏は幅広きものなる布にて常陸國信太郡
中家御戸主大伴ハ羊に天平宝勝八年といふ事を書きて
あるはあり 宝賭は儲宝の書き誤りなるべし 八年の下に
廿月とありしを書きて、御くらのには 此布の類
まりに幅狭くて見えたれは 尺にて長さは十二尺
服さしたる 一尺九寸ばかりの続日本紀に天平八年五
月辛卯諸國調布長二丈八尺闊一尺九寸庸布長一丈
四尺闊一尺九寸自今以後常陸國曝布上総望陀細貲
安房細布及出雲御庸布依旧貢之と見えて賦役令に

皆随近合成絁絹布両頭及絲綿ニハ嚢具ニ注國郡
里戸主姓名年月日若以國印々之と見えたれハ錦
合しつ尺ハ今のさしあてにたかひあるなりされと
此法によりて文尺の長さ今まてにたかはさるも
あるへく古物の傳はりたるはいとめてたき名れと古
き物なるに珍きハ太子の繍物といふにてはしめてお
こまれし文聖皇曼陀羅とて欽明天皇用明天皇聖
武天皇聖徳太子間人皇女膳妃廿五王子聖衆勝方
恵思弘法日羅蘇我妹子調子丸なと一幅に図し武
ぬひあらはれたるといひかきつけたり以下の世の物なや

と云伝へしをくらしくも同しくハ建長の法隆寺
顕真得業か記にて岡屋関白殿下よりうつし中宮御ハ喜
代の勝鬘経疏へ給ひ南都の経師寛尊よ縫はせかゝ
せられ東寺当に請暢せられ律の上人と定し
て尊蔵として時基蔵にて住持せしめられて
としくぬかりもとに見え舎利殿にいはらしい
南無仏の舎利を安置せられ宝物何まてあれ妹子
請来の法華経八巻一軸にて菊蒔堂上にあつまる経
て行り周尺とていけて家方りて造り新古る歴尺
のさ同しけられ此類よ行り周尺よハなさけまし

みて其天竺の文字をまじへてかゝれたり
五寸にあまるかみをもてはり太子製作の法華義疏四巻
真跡みて其の法華義疏第一と題の下に此是大委
國上宮王私集非海彼本と見えたり用明天皇宸翰
法華經八巻其の奥書に似て変多く見えたりすで
いつくしまゆうにして其の貝葉梵文其の太子御筆と
いへる有銀のはなをちらせる紙に細字をかきて
名香の壺觀音の法の其經親王紺紙金泥
の經其外世の宝物縁起其外の後に宝紙
残るもの文字書とゝ取出して七月二日に備ケ暁

とるもたに宮の井也金堂は太子造福の奉納山城
大兄王子にて見えたり其の本尊は釈迦如来其名高
き鳥仏師の作なり法光のうしろに銘文彫てあり
銅像なれは文字見付るなれとも年久しく
苔積りなれは讀さかひありつしかと其文曰法興
元世一年歳次辛巳十二月鬼前太后崩明年正月廿
二日上宮法皇枕病弗念干食王后仍以労疾並着於
床時王后王子等及與諸臣深懐愁毒共相發願仰依
三寶當造釋像尺寸王身蒙此願力轉病延壽安住世
間若是定業以背世者往登浄土早昇妙果二月廿一

日癸酉王后即世翌日法皇登遐癸未年三月中如願
敬造釋迦尊像并俠侍及莊嚴具竟乘斯微福信道知
識現在安穏出生入死隨奉三主紹隆三寶遂共彼岸
普遍六道法界含識得脱苦縁同趣菩提使司馬鞍首
止利佛師造とある此記ハ推古天皇の卅一年の文
なり法興元卅一年ハ推古天皇の廿九年にあたる
此号ハ聖徳太子の善光寺如来へ遣されし御書に
用ひられしと壒嚢抄に見えしなり法池知見あるへし
まことに法興の号ハ見えたれハいかゞあらんとあるやしたゞしハ後ハ十九中元
庚申とある古暦代にありし又中元ハ光武の年号なれハ推古にハ庚申なり
庚申ハ明帝の永平三年なり又古碑に大鵬二年とあるハ
さらにあつかはずなれハ緒氏筆記にしたがふもいかゞあらんか　鬼前太后

ハ太子御母穴穂部間人皇女なり法皇とハ太子を称し奉り
王后とハ太子妃膳氏なり推古紀にハ廿九年春二月己丑
朔癸巳太子薨ず氏傳にハ春二月太子と妃と同日に
薨給ふとあれハ是とハ年ハちがひてなかりしなり鞍首
止利ハ推古紀に鞍作鳥と記せるなり十三年夏四月
為造佛之工と見えたる人にて傳有又かゝるに薬師
の像作りしハ推古帝の年なるよし見えて法隆寺の
記文ありて池邊大宮治天下天皇大御身労賜時歳次
丙午年召於大王天皇与太子而誓願賜我大御病太
平欲坐故将造寺薬師像作仕奉詔然當時崩賜造不

堪者小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王大命
受賜而歳次丁卯年仕奉これハ推古天皇十五年丁
卯の歳にあたれり　文ニ池邊大宮治天下天皇とは
用明天皇の事也又小治田大宮治天下とハ推古天皇の
御事なり東宮ハ聖徳太子を申す也さて此堂内又ハ
とりの佛像ハいと古めかしく見えけれは世の名
高けれハなるへし　この記文並旧跡幽考には國林抄を引く
其の色たまふて如く後の事の義とらしとも世の為人ハ
之絶えるや此銘わきてこの摺写せしを世に流布れる
たてめたり然るに四天王ハ百済仏とて後光のうしろに

山口大口費上而次木閈二人作也又一の本ニハ薬師徳保上
而識師用古二人作也なといふ文字形ハ今とちかふ五重
塔内にハ釈尊の誕生説法涅槃荼毘の四相と三國
の土をもて鳥仏師造りしとてふいふなれとも此すミ
あまり後の太子堂ハ太子作本尊にて推古皇子の像は
出世の摺をこえしく感慨深し諸堂みなことく残るなり
不明なりよ推古天皇宸翰の額ありと云絶は何らく
摺てあれとも今の世ならの料てありてみれは分らず
文字ハ詳ならす何とも見えかたし然れとも
ともハ秘中今古の所謂物なりとありけり　古記に見え

侍りし也
廿二日 宿を出て 三経院にて物見しつゝ 西
園院の宝物とて弘法大師筆一切経蔵の額あり 古
物あまたみれとも略し侍り
廿三日 宿を法隆寺の東にて信貴山へ行 法隆
寺南大門の前へ出て並松村を出て龍田村竜田新宮
龍田川橋をわたりて左に神南 塩田川 土山（ド）なとゝいふ
処 椿井村 勢野（ヤ）村 南畑村 北に生駒山を見てより
信貴山へ山にのほる 廿五町の行程 村落より道をいそき
より東屋ハかけ流したる先に 本堂ハ毘沙門 南向也

厳の額より 秘佛にて今は箱のみ拝せしむ 立てて侍りし
さて奥の院に宝を詣けれは 眺望いとよし 所の宝
物ハ弘法大師筆 四幅あり 寺内三重ハ多聞僧正の筆
いつれもみなみえ侍りて 福寺行成卿筆といへ
と略し侍りぬ 吾なくハ 則家にて 伊
行相応の行事なき 土佐家の筆といへと
手練なしとて見えし 笠に大信貴に信貴とて
岩窟ありて 信貴畑村 笠の谷に出る 根本
一切見え 十七本生て作りて 大信貴
ハ行者作 長尺四寸（肆）八分（捌）余 左右の中七寸（漆）六分（陸）

餘帯ハ金具ハ洗銀にて鳳凰ハ蒔絵なり小縁ハ
頼義の作長一尺三寸四分にて有れまたさ六寸八分
帯ハ銅にて鍍金金具なし箔小さく二分余如く
作り漆にて絵りたる作りの鼓筒腰鼓筒振鼓
胡蝶迦陵頻の羽ても作りの楽也面ハ鵜寺と云る
有ともにて有ましいと古代世の物とこそ侍る
又楠正成の冑大袖太刀旗鐵の鞍もて作りの太刀は
法依寺也かつ遠ハ満さしく覚ゆ寶縁状とて
作りあるうけかうたまなみ也下向して立野村より出
右より龍田本宮作り社僧東一坊ハ法隆寺也西

園院兼帯也これより出て行ほど正一位龍田大明神
と申す社ハ舊跡のよしいへども此村なれ
ハ神南の社と申すもこうしけれども是を龍田山三
室のこうしいとちらくての龍田川ハそれ也とよめ
うちよしこそみと日々あさき行ハえゆかしきもれ
のこうし龍田川のもとハ萬代の大和のくらの紀ふか
きしこころも遠やの大和川舟も見つるたれより行そ
ハ法隆寺の麓なる藤井村との山を藤井山と云ふ王子村と
云達摩寺ハいつくしき舊山なれいれなうるえ
とても候まし候とも參らんに人のまゐりて候ら

旅衣きもうつゝまてきまれしこと絶うし
空もとへいむらしかたへくたれてるゆうこゑ也
の名なれ也とそれ
當麻従ふ文安年中に立し碑ありて今に出れは
知事に二上山葛城山東に在岡の城跡と云葛城の
河しは北東の頭しをのうらへ小はし北池といふは
ありしか多くは河しよりそこはそのかたに出ての
ことをなれしことを也人はわらふにすむ也人は
河をて河しは塚ありそはらうからこしそれは出る跡
と也といふ 上里村さる村下田村狐井村良福寺村

今在家村成の中に當麻村のつゝきなり
在昔寺を頼りてより消息をいふて定めつゝいは二
上山麻呂古山の麓なりしはいにしへむかし當麻寺
物拝見す今の本堂は新堂院村にて建保二年法
下良頓法眼源業の手勅していにしへに行きし文字は
行能卿勅を奉てまゝつりけるに尉司の廟あり時北
うかゝひと後白河殿上人満念を前下大小名多く普
散男女の名所なりし古書茶毘にまれうしみ
めるへくうらに世ゝの間せしに将軍ある間しと
は尉司の板に書きありしと延宝年中京都大雲

院の性急をもて後拾遺をえらはれしを別に全国と云遊
まよふ西鳥の曼陀羅の消息ありけりと伝し
給ふうちにいつもなんさる見得て出しける也之
頃えらはれしを後んしとも有しこと枝に張しは四條
院の仁治年中のことにて続詞縁起二巻繪土佐の
光茂詞は逍遥院内府の作にて後柏原院宸翰と
はり先附時の親王右卿西室右順なと都て九人の筆
なり享保辛卯内府の奥書ありて当麻寺と云る寺
は後京極院宸翰なりと書院にありこの〇てすなはち清
雜上人の行状を書る絵は土佐家詞は伏見院後伏見

院後二条院二帝の宸翰にて後二條院は清代筆也とる
ち定成卿長筆かり尊親王普翰等にて世に
流布せる本は云れとう流せしといふさる伏見院
叡山の兼昌法印に仰て此詞をつけさせ給ふよりつし
ゆへかたに遊立せる絵巻は新因院の命にて清乗
又別に一部うつさしめ給ふ也けしと後に兼昌の
新因院仰付れ時に写させらるゝ兼昌は十九世也第十一
世持阿上人の時象先大師像とは此院にうつせしか
此本其時来りしを以て柳の院に十種の宝物とする
ゆくと秘蔵せる絵なりは世十種は阿弥陀像大師影

器自筆の題選擇集持蓮花大谷遺骨円内陵舎利佛舎
利松影の硯月輪殿の七日此經傳りて又十界の屏
風とて名高き寳物あり繪ハ恵心僧都毘沙ハ伏見
院宸翰といへハいとたうとき物なり
廿五日定ける高武峰に詣て神の宮をとりけるて
行大橋村中村長尾村木戸村市場村大中村高田村一
向宗の寺にて草津川水うれしくわたりて渡りそれより
高市郡に入曲川村一向宗徳高なる寺あり蘇我川と
さふ川橋ありて渡小綱（セウコ）村今井村よりこゝ晒なりけれ
れい川堤ありて其所すら川の中流るゝ此所より古ま

り行は山もうけひよ香く山なと耳なし山三山を行は
山里人ハ橋明る山といふこゝなる此畑の中に塚あり松
一本なんそたてるかけもなくかしこき神武天皇の陵と
きこゆ心のうちにをかしみ拝み行郭意にて作詩

神武陵

山陵纔問里人求
半死孤松一畝丘
不有聖神開帝道
誰敎品庶脱夷流
既王像設尊金閣
藤相墳堂重玉樓
百代本支罷不憶
此處何無培一坏

行てたゝ畝傍村に出て是より此帝の郡の北の方にして
うね尾の右よりつゝきて金剛山うく山の行ならふ小高取

の城山といへるしこにつゞきて高雄峰にかよひて三輪山
もありこの四條新町より出るいつれの東南北構に久米る
この大房村の下すゑ川よりそれより下ら村小房村鍋千村
神武村城殿村勝突山この田井村村花は吉浦村
高村この河上こといふ此所のまへに橋のもとにて閑
の左とある人あり 河東村をさして流る河原よりこの河
あり此川にいにしへより 橋村橋寺本尊は太子
の御作とかいふに日羅の像の後は後山の佛頭山といふ
弘法大師此寺の縁起のよしいひ傳へし 碑文あまたのこれり この
寺よりいふ 橋の都此說ありとて 東門を出て

岡村に入岡寺にのぼる 此寺は本北都の記録にいはく
これ慈覚此所にてありしとそ 弘法大師草創なりといふ 宗
額は竹の字 光仁天皇 後嵯峨天皇の宸筆又勅使の
下向とおぼえしとかや これより 岡村へかへりて
龍谷社にまうづる 森のもとに龍宮井あり 保昌
紫式部ありし古 花にかよひしこれ延喜式に
いふ 龍宮に所々 神社あり 雲龍寺いふ
えしきをそはるものこそ まこと岩村に入る 此
間に都良子の第宅の跡ありしとそ 田畑の字残れり
の子といへる 芹橋の右 此旧跡也とて 芹谷といふ

むかし斉明天皇の板ふきのみや川原のみやもこの
あたりなりとぞ是より東に入は飛鳥村右の畑
中に大石みつあり土人はいはやともいふ古き墓
穴なるべしとぞ　上古村は飛鳥より浄御原の坂の
北なりとぞ　細川村谷川ありすゑに流れよし山に
至れる谷くにも音いと白く流れありてえもいはれ
ず　是より上村　この杜又鴫立の杜ともいふ古
くは大明神いまは是より坂ありて細川村と
いふより東南は山のいとすさまじくえもいへる
をかにて人家もゆく人にとへは多武峰とぞ　新嶋は

西にも見えて名をはしらずたかきところは吉野
へ越る道ありとて多武峰の下より入て鳥居の
まへなる寺院に中なる所のものは伝統といふ香
積院寺院伝統ありて此所に多武峰道ありその往所
からん人もここえのむかし忽然山坂をかけ越えよのみ
つもりゆくは後の事
十六日是より南へ行名所は中ふかく先本社に詣大和
いふつくも古跡ありて社は此殿夫に引入本社
うちみよ廟塔の荘厳はいと見事此所なり殊勝と盛
麗有くもりの中にありて拝殿にはその紙清観之

あるひは歌仙の絵は三十六人歌合をかゝり　絵は古永徳
と見え先年御目にかけたる也　神酒をそゝぎける
も寶物にも持出侍る縁起絵詞四巻ありしが上下二巻
かゝりし此元禄の頃かの補修の時よりなりぬと見
絵は土佐光信詞一條禅閤兼良公題は近衛基熙公なり
又後水尾院の勅諚ありて新写有りしより二巻あり
絵は住吉如慶　其詞は二條光平公代筆なりし時の
公卿二十人の筆なり　桜町院御製十五首宸翰
首　諸親王の封緘して持の幅頭書の法華経八巻
一軸ならび人の筆とも見え候　九條殿 師輔公 自筆也

大寶廣博樓閣善住秘密陀羅尼中巻一軸奥に此経
一巻臣師輔手自書寫以奉納多武峯於現前二世天
徳二戊午三月十八日と記せり　いとめでたき物にて世に名高き
京都の書肆中村縁蔵といふものゝ持傳へしと寛
元年にこれを此度中に納めし記文をひらきて見るに定
恵ある請来の九條二帝筆光は行貴山の所用にて化
かり霊象あるの塔此露盤あるいはありけるとぞ露盤
ある此寺の家系に記す記文曰此栗原寺者仲臣朝
臣大嶋惶々誓願奉為大倭国淨美原宮治天下天皇
時日並御宇東宮敬造伽藍之爾故比賣朝臣額田以

以甲午年始至於和銅八年合廿二年中敬造伽藍而
作金堂仍造釋迦丈六尊像和銅八年四月敬以進上
於三重寶塔七科鑪盤矣仰願藉此功徳皇太子神霊
速證无上菩提焉願七世先霊共登彼岸願大嶋大夫
必得仏果願及含識倶成正覚この記文によれハ中
臣大嶋ハ天武天皇の皇子草壁王の奉為ニ建立せしなり
和銅八年ハ皇子薨給ひしより廿七年にあたれり
記文の初ニ寺ハ院四至限東竹原谷東岑限南大岑
限樫村谷西岑限北忍坂川とありて此寺の跡
も荒はてゝ同し時のものとしもみゆれされとも證するものなし

雜事にも見えたり得しかど絶てなくなりしハいと口
惜き事なりけり其も世ニありし人ハかくなりやうも
及たりし又これ此鐘古物として樓に上り
てことよれハ田舎ニ見ゆハいつとはなしにへてあれはかくなりし
ハ此山なるを寺の物にかしくさえの中にあり
擬ニつ遺るなり昔聖霊院又陸國院
中にある勅額もなし侍る親王書ニて
の息隱明王院とある額のありし聞えしもさえ
ありけり又大職冠の碑定恵和尚の碑なりハ
如れずして大和大納言の紀ニよりされて後

再興の処なきハその時の道精に任られ元傳り傳
まと以上郊山雑記にハ天正の比大織冠の社代郊山
つら比す寺の長のむしろ増田右衛門尉長盛の時又
多武峰よりつけるを記せりかつ其岩窟によりて
のち坊々の所持とせし書画ハ何まで持来て他面
寺中よ移れ卿筆の源五郎物語を以て何ヶ年ハ
似て候きも世継語の時代ハいまだ柳大織冠の
木像ハ真蔵ありしを紀ともに寄て掉すとけ
くはしく記よし文小野篁作と云ふ傳ハ画像あり
まへに長着宝ありしハ掛幅せ偽りしもその写

の影とも何まで彫出されしは道にとりあるべし
ころよりある一説本社のきさにおちしら樹といふ
天竺の樹植てあり葉ハ梅でありいえる見えしとあり
果ハ人ゐるのとしよ人ぞ酒くの切放あり笠
土の上の中忠文字ハ定かなるかどもよみ黄済よ出州と
いハバ續證類よのせし菴羅果としかさうて為錫
うりはよ菜代志にものめハ湯と云ふ（傷せんべい）として切放と
いはゆり文御義よ東西隣よ甚多しといふ部
意ならの此詩

塔峰廟

明辟思舟棹大家出棟梁應機僵大憖定令紐乾綱婚
好桃夭契賞延藤蔓長策勲登太昂奉祀秘神岡寶塔
層雲外玉床埋石傍樽分太官酒爐送御前香像裂時
流血墳鳴或戎祥忠魂今未死威霊獲百王　疑護
廿七日より雨ふりこさめに出さりしに聖徳太子
御自画の像あり又太織の影聖貞信忠筆六字弥乃
唱礼なと拝み奉りてそれより藤ともに時うつりて立
のたまひしより三寄てん縁へ行ここの道ハ丹山の東口
より百市(モヽ)村は行すきて十市郡なりやかてひらく村音
羽村下居(ヲリヰ)村倉橋村はおもひの用明天皇崇峻天皇

都の記にも見えて下村馬場八町の間に左の方にみれ行
桜井村にいたる式上郡なり粟殿(アワドノ)村金屋村なとを
ひ村に出る是日本紀にいふ長谷泊瀬の俗にいふ
よりて大和めくりの記にも山辺郡なとしるとよみ
はなれて二嶋村鈴ノ二輪山の麓にゆきてさせ川
流る二瀬の流絶すして見えてえんそれなり
雨なとにふりもの跡なれるは流るれはなて何のゆく
わかしらぬも流いくもかしこ慈恩寺村
猶本村是倉村出雲村と云て初瀬村に入町はし
大名居行はいにしへ大和国にては國中四行の額なり

あかハいとめてし申の縁に宿す清書文より出之
と小池坊にハ勘持院月輪院なとも出仕して善財なる
宝物にハ相見先菱鍋大相國書院の縁起ありて一の
希物なりし又其家ハ東山傳通記にみえし也
なりし能相縁起詞ハ後奈良院宸筆のよしなと
絵ハ筆も流ころすへし古雅に面白くかけり唐
徽宗の奇特のよしと云清観燈墨虎華屏風なと
にもあれとされハ君臺観記にも載せ侍りしも
多かりしまうみれハことにハのくし書俗雑記とて
頼謙侍者の奥書ありて本十九巻なるの四巻をみせて有

大字唐の縁の書記ありしかし東家人のなとよりう
つゝし侍へるよしありしハ澄禅大師筆のよしにて
流らゝまてされハ安井道恕傳記なり裡書にある
まてかの近代梵字の能書と此されし澄禅に清
大師の龍白十如是とて流せしがあり奥に運敞
が記文あり清師澄禅世姓菱苅氏肥後國求麻郡
人幼離塵受戒習瑜伽宗年及進具負笈入洛寓智積
之僧房而遂講論之席磨義学之鋒者十有餘年業成
帰本国太守接待優渥郷里以栄之然禅以為累潜逃
出国境自號悔焉一鉢一錫行李蕭然名山霊区無不

徧歴禅自少小精思慈墨之学尤善梵書毎聞有前人
之奇跡必足累繭往観之頗窺得諸家之秘妙終自成
一家凡書梵字多用木筆之製以木作之以毛造之皆
名木筆禅之揮木筆之妙常人所不得而及焉其伎遂
達 天聴去丙午之秋 法皇 勅禅臨摹高雄山木
筆之十如是其十如是者傳云弘法大師之手澤也禅
登山而沈鑒者両三日即揮襟臨倣而写得二本並飛
白之勢點畫之奇異鳥人物宛如与元本無異矣禅謂
其本也有凡手不可勉強而成者廼擇其佳者以奉献
之 法皇歎曰臨本往々有似道媚於元本幸蒙 聖

賞如此也其一本留而蔵諸吾寺故記其始終以貽将
来云旹寛文第九歳次己酉孟冬日権僧正智積教院
傳法沙門運敞謹書　玄の時に見とさうく宿よりかへ
如廣川風のことくいとよそめならぬ業になりとも
しら給けくうつしぬ
於八日夜ある河すこのかつる長谷寺請書一見に境
内小独閻魔とり給あるのこれハ十王のさとりたく
あり焔王のこと一遍あり書せしめ給ふまかりし尉服を
とき給ひさうくいとうへ給うさん廣行筆とりて
うみこの一切経石の新いれ清経ある西園院

よはれし弘法大師の筆なりとつたへしそのゆ
ゑにまへの紫式部のこゝろもなくしてれあかいえへ
もあなかりけれともこれも何もうたかひなきと
へいゝ託んつる者有つとは櫻川のあたり石花
あきみか比上野國佐渡田にあり石梢の
此かたにむ(率)ひ備の碑一丈餘横五尺餘高二尺
五寸何の何と申しあふ所とて作りしあとあ
思ふ様に見ゆるなれはみやこにあらはこそ石の介
道成出湯と三鈷山よりして行く方の氏大さ
又もはれたる所にて殿へよりまつこと此山口五十町ばかり

の間たくも甘も山より流れたりとよけるあはへたつ
後にハ今はむかしといへる跡にして揭焉也さて
何ともかくも遍く記す万葉集なとには亦観音つ
の御こゝろもゆきもしかるをいかなるの名ゆゑに
さへ御の三鈷山よりゆかりして先平等寺に入
またい人祖の像ありて源氏は何より傳はれり七祖は弘法
大師の筆大師ハ高如親王の御筆といふて大
師の筆にかはれは東寺よりいはし浄蔵上人の
うつしとぞ筆者あり本祖より御伝ハ高社宮
神主とか人社家別つ生て葉同し弘法よのたちか

南丸閑なる庄也昔ありし乙女語とも云ふ新社
取神酒さゝげて出有る籤伐に指は手扶（タクジリ）ありなむハ
かみとりかやとしいハ赤き衣とりふところの社
のき渦よりそりて掛りよりしも敷竈もなくして
さ給ふのて各はとりうしつへ給いまたなきまいれ
と清蔵小手扶すへきわまさこえて日毎の神供
もさきをも給はより貝一の給いさきよ給ひとて
宝物に治といひよするとりかふによ紙律の茶
お寄附せらし大塔宮御筆無紋と云るものなり
給ふて古物もなしいと掛つる武具のあまりぬ

餅は大神社の知也寛永廿一年と云ふこゝにあり
おと婦のありいふなる本堂社東の間ハ大同ニ拾子
所のおゐて也此を懸しし冴足の跡ありとはよく板飾
はり柱なりし跡さえ見てとてのまして今の屋といと
なりしハさ清冬え何みなる経し旧跡ありしまき
無仁天皇の御りし三韓退治の通り也給えし
女子代よりあるしき子浅年のうしともりけりまし
入定し給ふ末代ニ奇特也これとそ数枚ニ清
足の跡とのこし給ふされ給ふ小あるしこの地と
太子傳選集抄と引くこみせ理宝物とも何れも

すゑなるも見えず下向して三輪町馬場村を東
村芝村箸中村といふに箸塚あり土俗は箸中塚ともいふ
崇神天皇の姑倭迹迹日百襲姫命の御
墓なり右は巻向山いと近くみゆ纏向村穴師
山の弓月か岳とかや辻村柳本村なとの前を過て
長岳寺に至る美形の辻堂あり土人はまめ堂と
いふ是釜口長岳寺也入口より刈安嶺をこえ山へ
十市を経て備前遠江の城跡あり釜口寺の
山寺より此寺境内を見其かみ遠江の伯父寺の
開基地蔵院住持とぞ塔頭普賢院妙華の僧

また何れとさだかならねど新古集に藤の口にて侍る見
ゆるなるみちのくれとかくて尋ね侍るが今の世には
しるべなきを谷下に流れけるも此里の寺なるを
名はく此の坊にいへるも此の坊の住僧ぞ
世をそむき侍りていまも猶あるを
あるはまれなりけりすみか此ほとりに住侍るも
是は万葉集にいへるといふことよし
歌よみにける花の陰にて多くの伝
来の宝物にて所々ある近江の池はつかしき
よもすがら日くれなんとしてこの道をゆくなる

よりふるき郷なり中山村成羽か村大保村大橋神社
おはします此佐保ゐ村にある河をも渡りしかなくはいる
は渡とも行しまつあるかなよりし旧跡画考にも
いはれこそしいは丹波市とや中の隅坪いはぬ丹波市
戌いかゝし一の櫟市とやいひし今の櫟市といふ所は
なかせし道をかへし行くとはいふなれとはあふるよや
古家ありしにかえりたる櫟市よりなる深いほと
ち化する由ありしはそのせよい道にかよひしたる
ましけ
花の日宮なるおくりなる神の社をとうていふなく

石上なる社中の河よいふなる川ありて布留川といへり橋あり
所よりも高橋とや社なるを何れと知せしことなる
としれなり神のまへなる神庫に四五尺あまりの白木の檀
河の邊にありしは聞くともいふさるもその何と
こみあるやなりや古へ何をかしはきみつ内かしと云は
ことありて化せの名書しもつかへのしなりなく侍る
なてる浦世見ることかなしく侍りなか河原俵村東原
あ所の三間ある家の形乳化よいひとし白し
これをいとうけ化せ所に侍りそふより添
上郡あり櫟本（イチヰノモト）村檜村森本村荻原村紫屋村

此所より南は菩提地蔵といふ所にありてそれより
此所をは菩提とはいはく大寺にしてあれ井村小永井
村貝塚村竹嶋是奈良の入口なりこれより
奈良町には中々の青木なれは京よりは一つ道に
あまた一ツ中ならなりこれは二條の大寺にて是のし
とうつし都をまうして邦にはしめの京なりや
諸まつりのよりそれにつまりて
十二月朔日光明時にくりよ今より西北の色あらく
てまつり法なくてりきかれは東大寺へ行平城宮
の文書なりなりしめてす後の比はこと継ありなり天平

勝宝よ恵美押勝かおもせし孝謙天皇の勅まて
とい細工を持つくみて御璽のこそのゆりふに常陸は
為のりうらかうつかて今は伊のみかりて聖武
天皇宸翰の勅出是は御細工にいませしそこに
次の世に表記にあたへし聖武天皇の我か興復
せは天下興復せんは我か衰弊せは天下衰弊す
つしとの法起文はわつしむの枝にあふしあるの法
さしくは金銅の銘文とそ言ふ此寺院は識者
とみは見へきと潤泰のことかいへまれき文曰
菩薩戒弟子皇帝沙彌勝満誓首十方三世諸佛法僧

去天平十三年歳次辛巳春二月十四日朕發願俑廣
為蒼生遍求景福天下諸国各合敬造金光明四天王
護國之僧寺并写金光明最勝王経十部住僧廿人施
封五十戸水田十町又於其寺造七重塔一區別寫金
字金光明最勝王経一部安置塔中又造法華滅罪之
尼寺并寫妙法蓮華経十部住尼十人水田十町所冀
聖法之盛与天地而永流擁護之恩被幽明而恒滿天
地神祇共相和順恒將福慶永護國家開闢已降先帝
尊靈長幸珠林同遊寶刹又願太上天皇太皇后藤原
氏皇太子已下親王及大臣等同資此福倶到彼岸藤

豎疑堅

原氏先後太政大臣及皇后先妣從一位橘氏太夫人
之靈識恒奉先帝而陪遊淨土長顧後代而常衛聖朝
乃至自古已來至於今日身為大臣竭忠奉國者及見
在子孫倶因此福各繼前範堅守君臣之礼長紹父祖
之名廣給群生通該庶品同辭愛網共出塵籠者今以
天平勝宝五年正月十五日莊嚴已畢仍置塔中伏願
前日之志悉皆成就若有後代聖主賢卿兼成此願乾
坤致福愚君拙臣改替此願神明効訓以上表小河の
裡よりた施封五千戸水田一万町以前捧上件物遠限
日月窮未來際敬納彼三寶分依此發願太上天皇沙

皆
疑皆

於勝滿諸佛擁護法藥薫質万病消除壽命延長一切
所願皆使滿足令法久住拔濟群生天下大地人民快
樂法界有情共成佛道以代々國王為我寺檀越若我
寺興復若我寺衰弊天下衰弊復甚其後代有不道之
主邪賊之臣若犯若破障而不行者是人必得破辱十
方三世諸佛菩薩一切賢聖之罪終當隨大地獄無數
劫中永無出離十方一切諸天梵天護塔大善神王及
普天率土有勢威力天神地祇七廟尊靈并佐命立功
大臣將軍靈共起大禍永滅子孫若不天平勝寶元年
平城宮御宇大上天皇法名勝滿とあり當寺四至の

文書曰東大寺圖奉　勅依此圖定山堺四至北一堺
箕川川上高峯二堺梅本横峯三堺鳴川北横峰并梅
谷東四堺馬勝坂又外政所東峯五堺内合井津谷南
六堺仙房并御笠山口七堺寺薗西八堺興福寺乾角
九堺野馬道并冨羽北坂合右圖堺勅定如件天平勝
寶八歲六月九日大僧都良弁○少辨從五位下小野
朝臣田守治部大輔正五位下　王造寺司長官正
五位下佐伯宿祢大倭國介從五位下播美朝臣らくて
紙のつきめにしよ良弁の筆名ありて絹にて
堂名のつゐてあらしの中にハいとおほく侍るなり

宸翰の勅書曰勅旨封伍仟戸右奉入造東大寺料其
造寺事了之後壹千戸者用修理破壊料肆仟戸者用
供養十方三宝料永年莫動以為福田伏願以此无盡
之財宝因施无相之如来普度无邊之有情欲證无餘
之極果天平勝宝元年平城宮御宇太上天皇法名勝
満藤原皇太后法名隆基（今帝法名）字様ハ御出ありて右筋落なり
勅封の三倉ハ御ことなる正倉院とて以前ハ西面
よ十七間有ける文庫ありとまへりあるをの床の下ハ
蔵をたてゝありけるとも今ハなかりけれハいとあさまし
是ハ杉やまて開ことなるやうに御所ハ龍松院とて

大佛殿の西の方にあたりて寳蔵あり額は年預也林
院とて弥勒の御作の浄出よりの図ゑ有ていさゝか文
庫ありそこの中に聖武天皇宸翰金光明四天王護
國之寺といへる額ありて竪九尺壹寸横三尺八寸也
是ハ旧記にあるには弘法大師筆のよしに記せりハ
ありけり文殊とまうし四天王及力士の像ハ太師の
作なりとぞいふ事とつたへありけるをやしなひ
せし僧のかたりしこれハまことに宝蔵のつゝきにて
坂にありし浅束西六間南北十二間あまりの名ハ
西大門といへる額なりその門天正十一年二月廿

弘ノ下ニ法力

九日大風ニ顛倒しけるより彼跡にはおほえもとゝいふ
みな此門は龍の棲家なりけり拾玉集に雲井
坂邊東大寺額字弘法大師所書昔有龍出自
井中奪壁額字毛爪痕尚存とこそ見えけれ
しそつねの坂を雲居坂といふよしいへり此清
大師ともいふまでの程なりし我国の大師とも思はれ
傳之後宗坊ハ勧進柄杓聖銘天造凡河の聖銘
あれとも東大寺東寺講に浄土の迎講証教五之内
建久九年二月二日大和尚南無阿弥陀仏とことを天
造凡にハ奉施入東大寺念仏所文治二年歳次戊申九月

二日 記時日 勧進上人南無阿弥陀仏とぞ云ひて阿弥陀聖
宝傳正傳東五綴子のめでたき深沈阿弥陀仏思識の道也
なるよしいへり東大寺要録十巻本願章縁
起章供養章諸院章付神社諸宗章付別所諸宗章
別所章付和上封戸庄章末寺章雑事章凡十章
長永二年八月十日東大寺ニ於テ観厳集之とぞ書
続要録九巻記録ニ詳良弁僧正真言仏大功徳經
同要ニ播磨硯などの風字様のごとくにて海ニ山眉の
ごとき此所ニ飾る金銅の唐獅竹筏流皆錦蘭豊
なりけるに古き代の物のようしつれるをしも見ゆるは

此類の中に鳥毛屏風書画ありけるはいつれも紙に書
うるはしく鳴れる毛を粘着して地からに染
其かたちのこり残まりて世にうつしけれと古き種
好田良易以得穀なとの句をかけるを永禄六年に開
封の時御覧ありしまゝに文字かすけて見ゆるにそ
ける所さるかいとも筆勢すはらしくそえかぬ世
に此かの鳥毛地からうつして字形合せてはらへとも
為ありしかもすめることのかきりありて此屏風
唐大和のはたせしのさしたる紀よし人もいはるゝさまも
思ひ給ふ書画のことにみえぬをいとねんころに

やとてよみくされは天平勝寶二年十月とあり
此はしまいりて調度まとりまかりぬ又紫北面
見いて御かくわかつ東の西北のすみに康平肆年歳次辛丑
參月拾肆日前別當法印大和尚位權大僧都覺源珠
抽清淨之誠施入東大之寺仙臺久號不出仁祠雅曲
遥奏將翺佛會矣永曆二年三月修理之とかきたる
ところもし
二日目氣色よくおはしまして東大寺をおもむき
給ひつゝ此は法華八講の神主神國の名をかきて
神事の日なりけれは蘇のはしのおもてに大納

ゑ入道寂蓮卿の筆にて縁起の繪圖をかゝれける寒
かりけるにの大寺のうちにありたちまちに観念を發
めし暦にて
二日まのかたに拝すし大佛殿炎上再修ありのすいよ
きえつ蓮華座の龍とゝく佛像酒になし山寺條なも
いかはぬ形見くはる事を人もまれにあり是には
剣の物の物にれむとゆすれるかの恩ハいは後の露に
済つまじ不臥にてあさゆ鋳もなし奉鑄能蓮華
八葉高野山一万勝院金剛奉行遍照院にていたく字
形もいへたて佛像の筆意丸絵にもいとゝく

まれにしよかとへいまの世の人の悲にこえけれん
あはれし学ぶ八角九尺殘燈臺ハ宋國の佛師陳和卿
か此國にて終りしもの也又ハ像をうつし宋國より
渡せしとも以れは居士このへもたれ麁の後楽の
かのく樹子の枝讀つけ樟のふ枝燈切德經本業
經閻王受決經の文をとへる字畫清婉にて此れ
かくいふ事路理の地にしこハ薩摩守忠度の文枝よそへて
枝よくいはる曰南都東大寺大佛宝殿者天平勝
宝四年聖武天皇勅願成就之伽藍也尓後四百三十
二年高倉院治承四年十二月二十八日為平重衡所

所棲安德天皇養和元年醍醐俊乗坊重源始發大勧
進之願至後鳥羽院文治三年四月後白河法皇命鎌
倉右幕下源頼朝卿再造之仍令重源掌其事建久六
年其功全就三月十二日主上行幸頼朝参詣先之二月上洛
○慶之自是而又三百七十三年正親町院永禄十年
十月十日再羅松永久秀之兵焚尓来百四十餘年貞
享之初東大寺龍松院上人公慶奉　勅許　台命以
張勧進之勢遂終修復之功實宝永五年六月二十六
日也明年三月有供養之儀今之上人公盛修之云吉
貴辱右幕下之後裔領薩隅日之三州祖先之志不可
不継子孫之福不可不祈追遠計久思而弗措於是命
匠新搆曼荼羅壇一基製什器一部別鏤舎利塔以納
殿内以表心裏上則助祖先之冥業下則期子孫之永
福云宝永六年三月十四日鎌倉右幕下二十二代苗
裔薩隅日三州主兼領琉球国従四位下行左近衛権
少将兼薩摩守源朝臣吉貴識とかきよこまるまて書
侍られとゝとらのかミさゆうなる文字あるを唐土まても
蝿頭かなとなへしときん萬えしまうらつしつ時
ことをよくうんハきみおわれ大佛のまへよてえ見れハ
きこえけり名なりまそれこの位署のさ崗といふなるへし

二月堂ハ眺望よき所なり法花堂といふは俗に
三月堂といふ柱に保延元年八月廿二日千日満但結
願九月十二日畢又こと柱に始自長兼元年十一月
廿八日千日不断花也なとも彫つけり此法華堂の下に
手向の庭といふあり其の東の方に東大寺法華堂の庵
室也と大字にて記して有聖武天皇宸翰なりと
いひつたへたれとうけかたし四月堂といふ般若
寺あれより南都般若寺鐘延徳三年辛亥十一月十四
日大工藤原宗次願主法印権大僧都宥典ハ鏡大施
主川福崗大工壽ゝ下田孫五郎と鋳付てあり東南

院の跡は南大門の外にあり花宮池のほとりにて坊
舎なし東南院は門の内にあり弘法大師の創建なり
四日南の御門年時よりさして般若寺へ行大塔宮の
かくれ玉ひし般若寺の大般若の唐櫃あり般若寺を南は法
華寺とて法華寺へ行けれとも尼の住給ふはなかりし
大安寺北室にあり神功皇后の御宇に北の
ミつ蒙古おほせける國主の代大安寺の縁起旅宿へかりけれ
まてしかすする人にいひ出すり春日の社興福寺なとへゆかは
東の社新薬師寺にも行さきの東焼たるを見て名残を
神宮もこまく拝さんとならて拝みてたちよりつかふ

藍ノ上ニ伽ノ字アルヘキカ

猶そりと興福寺もむかしの本尊中けりせし泗
濱磬華原磬のかいさせる絶もすへきて二膳供物の
難行りと守つ重も粗くあまかとさる絶いゆるよ
ふるゐきぞのさむかしわたし給ふる物しらやいと
いみりし銅蟠竜の猪ハいてあさのりそてある某
工松井和泉の家に法隆大師寺の寺物の某宛
子調させ作らせぬる物也また興福寺二諦坊は
伝なるりしと蓮花上の時の北坊と西金堂のつ衆
そこるあすり一所の中かりけし也しわりしとおやの
和泉守とくりしそ二諦坊は法隆大師御社の後

寺よりの伝受せりしかたちにて其銭数せしられま
ありき方もまことわ泉の家につたへりしと云又
南都堂の油升とて銭形の物持せり方伍寸弐分深三
寸升形也めくりに南円堂自三ヶ庄納之油升也本
升依為破損今度ハ二之升懸院之沙目並寺地堂
寺の國於安清とありて院主寺家あまたそへてあり
又此形し物のうつし絵図としてありしかハとめよ
南円堂御油升応永廿三年丙申堂童子清川と
かきたりしに院主等名あり又興福寺の鐘銘等
本のうつしありし文曰恵日照曜三世揚光法水冲

灑十方分色仰之利益如鏡鴻形帰之功能似谷通響
勝家曩祖兮淡海公華攝仁祠稱興福寺社稷所以得
其安全君臣因茲頼彼保護経始邈矣及五百年靈験
掲焉遍三千界皇王儲貳公主天孫補佐賢才戚里良
弼倩憶累葉皆出一門風雲感生魚水帮協治兼四載
嘉平窮陰回禄作宊〔灾〕升元忌術是以今上降紫泥宣旨
匠殿工渾墨施巧就中博陸抽丹府誠龍攘鳳甍輪奐
仍旧佛像窮妙堂舎盡華若非鬼傭誰謂人力蓮眼如
瞬肖瞻生身菓脣欲言可嘲毗首錦幡殊勝随風飄颻
銀盖金樞納日映澈霽高暮律黒月良辰儼供養儀唯

御齋會槐棘従事鴛鷺埶行三百禪徒梵唄讃歎樂懸
眤過漢天雲舞態嬪紛迴洛浦雪先聲白業奉祈紫宸
唐尭譲仁周誦倂化母儀芝砌保松栢齡后記椒房誇
栄菸詠院宮處々藩邸家々日月不傾春秋鎮冨長者
尊閣駿破堆遐嫡嗣将軍栄貴相寧用治世政訪聖帝
猷温故知新興廃継絶伽藍養善禾苗旀昌三公九卿
百僚庶尹同旋他旋或尊或卑共共遊祐庭右住壽誠
建立本願遠近盂靈早依慧薫併攀覚薬降臨莫道倍
増威炎鎮守社壇飡受法味鐵圍砂界六趣四生出離
迷津開悟真境建久五年九月日とあり奥山文章博

士業實胤卿宗建也啓下字ニ可然事也仍下知師也
御坊なと云はれけりねのうゐのまゝ侍るに関のまゝしとも
まことに忘れ侍らとてしるしけり
廿日宣下ありけるに此ある縁起とゆつれ給ひつゝしか
時より一条院室よの御名を樗邉坊胤卿の素縁と
云るに此野卿ハ名字武藏事にて見えけりそのまゝハ
侍らすさりけりやと申しけりきこえける道とかりける
やしはさらすさりけれハ仍ふしも両の名よりける
うけいれさせたまへる也けり　天長十年九月廿一日
從五位下藤原胤卿年子の名文なり　奥ニ中務門

親王の署も侍りしかはあらはさる御筆中にまさりし
坊かきせうゐる筆あり奥ハ此を坊かきてある事まゐる
すゑよ西宮道忠公兼明親王も御筆まては樗邉坊胤
卿の手を仲都の二字ハ正筆なれとしめより
とかりまて御へ日記に見えてかしこて奥ニ印章も所見
とうすへきてこよみとこそ申し紙も神もそのまゝなり
わりハふしてはへ此等はなりとそへハ思乃
ゆゑや禁裡御所より恩賜のよし聞ゆる名の小紙
紙をしるして樗邉坊とかけるまゝハ中院通村十輪院右
府通村ノ白川雅喬王などにいはれたりしまゝなりけれハ

きの名物ならしものまゝやいと惜かりしぬれにて弘
法大師に渡進し給ひ一きはよき蓋なりと
そて其銅燭臺の絵もけに同し儀の品なりしとぞ
信用せられける
六字名号法印の文字にいと薬師寺之の講堂
にむかしありしとせしは名にしある六宗の境内
天武天皇の御宇に草創の始めありし宝物なり
奥書等の大般若六百巻五言残れる真字なり
弐百巻弐百十巻なりけるか世に散在せり弐百巻の
ふらなりしいふ法隆寺蔵境法深草虎谷山院

大字経蔵の唯識論紺紙金泥にて十巻光明皇后
真筆法華経開結二巻共十巻是も紺紙金泥なり大悲
菩薩の勧進なるよし拾枚石御舎利勧進の八字なる
あり縁起拾四巻西大寺塔院地蔵院古澗の筆なり拾
茶掛なるべし名物の古筆もあり又金伏外段錫
外なしにある茶釜の外あり金伏は方肆寸肆分深
弐寸壱厘なるの外六合六夕にあまる段錫は方肆寸肆
分深弐寸五分なるの外は八合にあまる是なん十合といふなる
長金とよぶもありしらるの一外のますや古記録
に長金十合金伏なるべしと見えし彼の道風朝臣筆

の讃慈恩大師の影あり是ハ戒明和尚の将来の恵基
法師より授りしと云ふ今残ハ別のきる所へ入しと也
文字ハ第一名也慈恩名ハ窺基字ハ洪道姓ハ尉遅氏
魏の平東将軍説の末孫なり宋高僧傳にみゆ
此讃ハ今も見れしとこそ書ハ花ハ云名賢
子遂ハ思ハ撰家従輝目一覧ちん傳耳雅聞ち綱
撰修儀章疏論等疏一百餘部文方適遁禅之意若形五
臺山造玉石文珠像写金字般若經大蔵報光瑞異矣
五十有三永淳元年冬十一月十三日示寂于慈恩院矣大宋
文皇帝御製讃曰巨哉哲仁迥然出群疏造而当之

萬人好閑性於理奧天親口劒四辯詞叢大雲昇龍
法井之玉西歸満月叢解電光昏衢叢日昔海津梁
御申讃聖執能宣揚とありて宋高僧傳よりハ永淳元
年壬午示疾至十一月十三日長逝年慈恩翻經院去
秋也十一月とかきたれハ此讃と是同しからぬや是も
容貌とひいて頂員玉枕面部宏偉眉秀目朗なといへる
いまもの也ありしさまをうつしてうそなし近古の文書
とも数十通ありつ法相家よかきそへつしとよも
しきりしハ仏ことうやとなりけれハ寺徳院
の運ともなり学すくれたる付されしと浮沈しぬるのことく

福田

に高宗はすへて入部の字といつめて由なし論に及ん
かと思ふは清浄わかしとよむべきにやとぞ覚えし。いで
この塔の榜の額は後人親王の拝み給ひしとぞ
なれと世へに六層の塔上層は甚風をあげしなれは又毎の
遠影とは世にもたとへやうて部意めしのいまはかなき
ことにためしなき佳と喚ひしは美べきもの也とぞいふ
那しも高く出たる塔の如くなりおさへをもちそへ
浄んしたるの影所なく紫雲に世界あれはまあまりこ
ちりよせて第一層の塔の上に宝あるをまりてある出来
まるにつきて法華経の第二層の内に入られより第

六重迄ていふうちにあやしのもし何なにすまり都から
うしで頂上までの形なるはこれは工夫の修補の為よの
さまとそえますすくに見ゆる枝にえんまうち又はよし
なまくれなるかはりけしは高き峰にもしまた代すり
としを すかき処をくる色ゆくすへとはかせさたにいえん
こ所し六重の塔のよ文字ありて下まり高く残
おしはけ塔のうちふなもとりけ鳥はあとをわけて
見ともわけ出る色は東のみたかすみ山みちの中より
ゐかは生駒ろけけて向ふことにそえて雨中の眺
望まさるやうなるべし 此つゞき天地はましまたに

柱ハ高サ九十六丈九輪の長サ卅三丈なとかけるも此
高く九輪の心柱をたてゝ屋の上よりつき出したる露
盤といふ方五六尺はかりなるもの也高さハ二尺はかりなり
露盤のうへに上のはしらをさしとほすかたの[illegible]あり
[illegible]とうけくいふそて露盤よりの[illegible]とし[illegible]
此[illegible]露文ハ心柱の東北方よりえて[illegible]
塔の心柱をハ檫といふよし明和名物よりえたり
檫の語をいふ[illegible]世人の露盤の語をいふハ
[illegible]ありける露盤の上にたてるハ九輪の第一段の
上に[illegible]語ハその下に[illegible]

さる物なれハいとはるかなる[illegible]此段のさまハ露盤の
ことならす[illegible]これを佛にて[illegible]其露盤文ハ
世人も語る[illegible]天武天皇
即位八年と[illegible]日本紀と[illegible]くさの親
王の[illegible]
[illegible]或人の説ハその[illegible]の寄録[illegible]
日本紀擦竿の時より[illegible]
もとより[illegible]奥書乃
額の字[illegible]と傳へたり[illegible]かくて招提寺
一説ニ孝謙天皇宸翰唐招提寺と記す額[illegible]此額よ

えらみ奉りの中ハとりて道風朝臣の式部卿巻
これハ東寺にハ八幡宮の御経とかや申して新宮の
経忽に加はれ奉りのすこし消されも侍り絵詞
縁起詞書光明皇后の世の事を記せし朝臣の書の
筆もしるしに?の鑑真和尚の東征伝を書き一
寛元??書写せし四分戒本聖武天皇宸翰の大
般若経小字なる一巻光明皇后の六巻経或は梵網戒経
二巻吉備公真跡大般若経一巻などして跋文とあれば
いふなりける夫以般若経大乗者称乃三世諸仏之
肝心十地菩薩之宝蔵然則敬依者雖不消災納福随

順者豈元断惑謹真伏惟為亡子坂上忌寸氏成秋穂
等慈光秀故出羽介従五位下勲四等坂上忌寸石楯
大夫之厚恩撫育之慈高踰須弥助護之悲深過大海
縦生累却砕身捨命何得報哉方欲西母長寿晋於ヽ
ヽヽヽヽ盡曾参之侍奉極仲ヽヽヽヽ為子之至誠展事
親之深ヽヽヽヽ命之最催年報運既窮ヽヽヽヽ誠有爾
慈顔元感泉路轉ヽヽヽヽ地而雖悲歎都無ヽヽヽヽ治
領袖唯有仏法必救恩慮ヽヽヽヽ宝亀十年歳次己未
閏五月朔ヽヽヽヽ紀朝臣多継并男氏成女ヽヽヽヽ
結言奉写大般若ヽヽヽヽ為遠代之法宝也ヽヽヽヽ

用奉資先考之神、、、、、海速到極樂之寶、、、
早登摩尼之玉殿と云り西大寺の金堂に鵄尾有りお
ほきなる鵄尾の瑞有りしこの堂のむねに一ツ又古物
一ツハ新造なり古物のかたはみな字有りといひ
傳へて侍りしかとたやすく見るへくもあらす折
講堂ハ幸城高の胡集堂に成りてありしそ
さりしと見つるはさらになか寺もえ見え金
堂なる鵄尾（鴟カ）も有りけれとそのかみにもさなかりける
とてもわきはつきておもやまりやしりんと物えたる
人は明かなりたるとも出て折の字寶慕山まで

まかりぬる池のもとに行きて大なる池の中に一ツ二ツありて所
ありそなたに垂仁天皇の陵とききて心のうちにある
ほとりつかひまかりつゝ行く喜禅山をいふ上なる祠行く
これもみかみまかりしにぞ安康天皇の陵とそ
すかたを物したるにそこに大なるものに入る承元年十
月二日渡辺東大寺大佛光殿正四位下行左大夫
小槻宿禰と云る勝行り太政官の印を押して來る
あるかはりに數多くあるになりてしるし寫しもて
まれと唐物といふ見えるにいとあやしくそとまる百済
來るといふ經のち喜禰の金光明最勝王經のかな題

は孝謙天皇宸翰なりとて跋云維天平寶字六年歳
次壬寅二月八日菩薩戒佛弟子百濟豊虫奉爲二親
敬寫法華經一部金光明最勝王經一部金剛般若經
一巻理趣般若經一巻本願藥師經一巻合廿一巻莊
嚴旣了伏願憑斯勝因奉資冥助永庇菩提之樹長遊
般若之津　又願上奉聖朝恒延福壽下及寮采共盡
忠節　又豊虫自發誓言弘濟沈淪勤除煩障妙窮諸
法早契菩薩乃至傳燈无窮流布法界聞名持巻獲福
消災一切迷方會歸覺路などしるして永長二年三月
六日辰時點了とかきてあり藏の寶塔は木曽殿の

武運を祈て造りしとぞ始自弘安六年癸未十二月一日至
于同七年甲申八月七日造畢日數六百九十六日大工
藤原宗安大願主西大寺沙門叡尊と見えたりとぞ
日のくれかゝりければ雨ふりいでて道もとをからねば成の
時をうつさず残出てなりまの之溝道ふ泥のはしと云
所に□□□□□□□□
此所のはしといへるは所は藤のこの橋
道を大和川になり橋ありここ橋といふはのこ
こゝにいたれば是なり
残せすぐにえれは生駒山いと

此橋よりあゆみ過てみれハこ袖を名付しといふち
なりこれ所ゟ高遠見えあと読らしてなりけれハ歩ミ
峰まちしハらゆるといふ玄の時をまうけて流れ
七日になる大なる湯起りつしてなりて池ゟ流るゝ
よりたいらくの芝つけらるハ元明天皇御火葬の旧
跡なりこの事ゑなしけれ小山成芝といふなりたい
らくとは大后宮とも云つゝの帰なりしかるにこの事ハ
よ落葉乱るゝや子の山路落所見いまを尤いふとて陵あ
所の見えぬ道路の越ハ揚島にて竈の所とす
継る隼人の像といへる石三ツあり此しハ七ツあり

しまやうらの字成七足机となりてゐるなり奈良の岩
石を此所よ河うへにその誰人のかけるやかしこにうつし
めとそ乃ち能文にてあつると也なりしき紀よ貞韓すす
やとし時まさいふへきまうけるを継りしこれらなる人の
ことを過てかへハ昔のことハつゝみえぬ中ともよりハ所なり
石ともいはれく流ともの石よ河をされハて所の名にて
此道ゟ眉間るとて眺望よろしき所り佐山より
まへもかしこなる聖武天皇の陵なりて巖定なり
かたそらふ元明皇后の陵海を北落所りとゆへハ
見ゆれ東よ佐ちとある山成多つ山といふ松永繁茂

の城添下郡聖武天皇の陵たまへる所を武とたてまつるへ
よりて法花寺といひ地を給ひしより此代とこそなれ
ならひ此代まうでて佐保山にうつりぬるとそ佐保
そのころ鳥羽院の御時にていとあはれなりしに
おもひすてて佐保山のうへにつき奉るなり
さかり川のほとりにまかりしに此まれともうへの元興
寺極楽院にも見えしに又まいりて西のかたの堂にて
六字の名号かきたる天井板ものこり元興寺の五重
の塔のあと市中にありけるを見てむかしを思ひ出せし中にも
いとあはれにぞおぼえける

八月亥の寛永の時に京の人のいひしに
むかしの前に出家せしをそれ井手に見える所に
立よりてはしまして法の庵を形見まて以て
来し道なりしにも巨椋堤にかかりて
出けんこのあれいとこそ見えしにもあはれ
て五条の家に帰りて戌の時ちかくに本
終けるの例によれる

明治十三年四月以徳川昭武蔵本謄寫

校合

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan